

王族カルロス・ブラガンサの救援活動と亡命の後半生

第一節 危機管理の強化とラフォエス公爵兄弟の貢献

緊急政策の功労者としてフィゲイレドに称讃される初代ラフォエス公爵ペドロ・ヘンリック・デ・ブラガンサとその実弟ジョアン・カルロスは、専制君主ジョアン五世の甥にして、当代の国王ジョゼ一世の従弟である。スペインからの再独立後、ブラガンサ王朝第三代のペドロ二世は、フランス娘アンヌ・アルマンデ・パストレとの間に嫡出子ミゲル・デ・ブラガンサを儲けた。一七一五年ミゲルはアロンシエス侯爵家の独り子ルイーザ・カシミールと結婚した。ブラジル鉱山の開発を推進したペドロ二世は一七〇六年に逝去し、即位したジョアン五世はまもなく神聖ローマ帝国の皇女マリアナ・デ・アストリアを王妃に迎えた。一七一九年にミゲル・デ・ブラガンサの長男ペドロ・ヘンリックが、その翌年次男ジョアン・カルロスが生まれる。すでに一七一四年に王位継承者ジョゼの誕生を得たが、相継ぐ男子の出生を王家繁栄の吉兆とジョアン五世は欣喜し、宮廷礼拝堂での洗礼を用意させた。この儀式には国王をはじめ多くの王族が臨席し、初代のリスボン総大司教トマス・デ・アルメイ

ダの主宰でなされる。同時に国王はミゲル親王家の繁栄を祈念し、将来新たな公爵家を長男に創設させるよう定めた。

一七一八年二月一七日王宮礼拝堂において総大司教トマス・アルメイダの主宰によってペドロ・ヘンリックの洗礼式が盛大に行われ、伯父である国王ジョアン五世が教父となり、王族のフランススコ親王とアントニオ親王も臨席された。洗礼式の当日ラフォエス公爵なる爵位が保護者に委託され、同年十一月五日付勅書によりその母君にラフォエス公爵夫人なる称号が授与され、一七一八年四月二日付法令により適切な処遇を受ける特権が認められた。

『ポルトガル歴史事典』^①

一七二〇年次男ジョアンの誕生も宮廷の祝福を受けたが、早くも一七二四年父ミゲルが二五歳で不慮の死を遂げる。テージョ河を渡って対岸での狩猟に出掛け、帰途夜の嵐に襲われたのである。夫の水死後五年にして越え

① D. Pedro Henrique de Braganca Ligne Sousa Mascarenhasda Silva, 1 Deuque de Lafões. *Portugal Dicionario historico*, online.

て妻アンヌも世を去り、ラフォエス兄弟の世話は、祖母である第二代アロンシェス公爵夫人に委ねられた。^①

兄ペドロがどのような教育を受けたかは、詳らかでない。当時王侯の子息を育てる方途は、通常いわゆる私教育、お抱えの教師による個人指導であった。ジョアン五世の熱意から察しても、将来国務の重要な任務を果たすことが期待されたであろう。ラフォエス公爵家の兄弟については早くから卓越した天稟が噂された。一七三一年巷間の情報誌『手書き報知』によれば、「ラフォエス公爵とその弟君ジョアンは、すでに数カ月哲学を学び、今後ながく諸学の研鑽に励む決意でおられる。」^②いまだ十三歳に満たぬふたりではあるが、に「同家は代々博学家系にあり、高祖父である枢機卿ルイ・デ・ソウサ猊下は三万冊以上の蔵書を遺した。」

英国の海軍提督オーギスト・ハーヴェイはイタリアやフランスの宮廷で歓待され、多くの貴顕と交誼を結ぶとともに多々浮名も噂された。一七五三年の秋リスボンを再訪した彼は、ジョヴァンニ・マンゾオリ主演の宮廷オペラに招待される。この地で彼はジョアン五世夫妻と舟遊びを楽しみ、国王の従弟ドン・ジョアン・ペンボスタと旧交を温める。これらが記録される『オーギスト・ハーヴェイの日記』では、同年のブラガンサ邸訪問も語られる。

翌日（一七五三年十月十六日）フランス大使バッシとブラガンサ御殿を訪問した。国王ジョゼ一世はい

① Antonio Caetano, *Memórias históricas, e geneológica dos Grandes de Portugal*, Lisboa, 1755. pp.3, 12.

わば王室の衣装箆笥をすべてそこに保管されている。それを管理するヴィルグリノとその妻が、大使夫妻を出迎え、優雅な晚餐で歓待してくれた。ブラガンサ御殿でもっとも素晴らしいと感じたのは、教会の聖器として制作された五組の大型燭台と高さ六フィートの十字架である。金色の化粧室は現王妃の結婚に際して造られ、その装飾はきわめれ美麗である。（実際には使用されていない。）ベルギー製の織物で覆われた寝台は、これ以上立派な夜具を見たことがない。貴重な絵画もいくつか供される。寝室を飾る美術品の多くは、中国の皇帝から現国王に献じられた贈物である。そのほかふたつの部屋には世界各国の軍服や軍需品、さらには歴代国王軍の記念品が数多く蒐集される。きわめて高価な骨董品が充ち溢れ、使い途もないそれらは、安住の地に置かれたと言えよう。

『オーギスト・ハーヴェイの日記』^①

若き日に哲学と文学を修めたペドロは、やがて宮廷で重きをなし、高い人望もした。一七四九年彼はリスボン高等法院院長に任命され、司法機関の統率にあたる。大地震発生の前年執筆された名門家系総覧を参照する。

初代ラフォエス公爵ペドロ・ヘンリック・デ・ブラガンサ閣下は一七四九年高等法院院長に任命され、

① Augusta Hervey, *Journals, the Adventures Afloat and Ashore of a Naval Casanova*, edited by David Erskine, London, 1957. p.150.

現在に至るまで案件の究明や訴人の保護において寛仁な雅量と美事な手腕を発揮された。閣下の迅速な決裁と丁寧な対応は、司法官の模範であり、当事者の脳裡になくく刻まれる。

カエタノ著『ポルトガル貴顕家系総覧』

大地震によってシアード地区の豪邸は倒壊したが、当日公爵は首都近郊の所領アルプリアテで休養していた。『緊急政策集録』などの公文書には執行における具体的事績がほとんど誌されていない。しかし、危機管理を担うラフォエス公爵の統率については、市庁に蔵される古文書『リスボンの艱苦と混迷』が比較的委細である。

「第二九四項」折しも高等法院長ラフォエス公爵は通例の休暇を得て、所領アルプリアテに滞在していたが、急遽リスボンに戻り、サンタ・イザベル緑地を拠点として国王陛下の王命をただちに執行した。この緑地に高等法院もしばらく移転して、司法官への勅令をはじめ、各地諸機関に対する数々の指令がすべて処理され、夜間も邸宅で休むことなく長官は、多数の避難民と同じように貧弱なテント小屋で執務された。

「第二九五項」破壊されたリスボン市街に盗賊があまた跳梁するため、警察と軍隊がそれを彼らを包囲し、ブエノス・アレス地区や四道辻、さらには諸処の丘陵で高等法院院長と司法官多数が連日指揮された。

「第二九六項」こうした施策はすべて神速かつ慎重に執行された。重罪と判断された全員が、グレー船での苦役を命じられ、その後主要な公道の整備を科せられた。迅速な指令によって住民の便宜と往来が復旧されたわけである。首都および近郊の兵士も瓦礫の処理に多数参加し、国王陛下の命により特別手当として最

小限八十レイス、大抵は百レイスが支給された。

「第二九七項」住民のリスボン離散を憂慮して、高等法院院長は適切な方策を近郊全域の司法官に命じられ、地方の司法機関にも伝達された。すなわち、リスボンからの逃亡者を拘束すべく、各地においてすぐさま捜査を始め、疑わしき者を取り調べることである。かくして沢山の離散者が首都に連れ戻され、罪状に応じて処罰された。

「第二九八項」卓越した長官としてラフォエス公爵は幾多の措置を主導された。配下の司法官および行政官すべてに適切な指示を与え、また潜伏せる少数の犯罪者に然るべき刑罰を下すべく、敢えて死刑執行人の責務に就かれた。多数の適切な施策がなければ、地震や火災から護られた貴重な財貨が、無法な盗賊によってリスボンから完全に奪い去られたであろう。長官の指示に従って彼らを追跡し、隠れ家にある多大の盗品をも押収したのである。

他方高等法院長官の実弟、ジョアン・カルロス・デ・ブラガンサの救援活動は、フィゲイレド著『リスボンの地震・火災に関する報告』において称讃される。

こうした地震の直後に住居、街路、小道には死体が散在した。拱門の倒壊によって頭脳が破裂した者も、障壁の倒壊で押し碎かれた者もいるが、それらの大半は合掌や石材の山に埋れて、瓦礫の重みで重圧や窒息に至った。四日後あるいは六日後に救出された数名のほか、驚くほどながく耐えて、九日後に救われた人た

ちもいる。彼らのひとりは十五歳の娘、ディオニシア・ローザ・マリアであって、無傷で生存していた。建物が揺れ始めたとき、この娘は聖アントニー像を即座に抱き、その直後家屋が崩れて、食物なしに九日間荒墟に生埋めとなった。遺体に囲まれた状況で彼女が発見され、総大司教教会の高位聖職者にして国務会議の参議であられるジョアン・メロ・サンバヨ様のもとへ無傷の姿で運ばれた。この方こそ出自と徳操によって名高く、市民を瓦礫から救出し、即死を防いだ功によりリスボンから篤く表彰された人、少数の側近とともに二百四十名を埋葬した博愛と慈悲の人である。なおまた、こうしたキリスト教徒の責務においてポルトガル貴族のなかでもっとも傑出する人物は、国王の従弟にしてラフォエンス公爵の弟、ジョアン・ブラガンサである。人々の命を救うため頻繁に徒歩で全市を巡察し、死せる者の埋葬と生ける者の救助に専念された。気高くも自己の生命を危険に曝したこの方こそ、永遠の栄光に輝くのである。

フィゲイレド著『リスボンの地震・火災に関する報告』^①

第二節 ジョアン・カルロス・デ・ブラガンサの後半生

① Antonii Pereira, *De Terrae motu et Incendio Olisiponensi, Cujus ipse oculatus testis fuit, Commentarius*

Latino-Lusitanus, Antonio Pereira, Commentario Latino e Portuguez sobre o sobre o Terremoto e Incendio de Lisboa, Lisboa 1761. pp.3-5.

初代ラフォエス公爵ベドロ・ヘンリックの実弟、ジョアン・カルロス・デ・ブラガンサは、大地震の発生からほぼ一年半後、一七五七年五月二日にリスボンから出航し、フルマウスを経由してロンドンへ到着した。以後二十年に及ぶジョアン・カルロスの諸国巡歴は、これなる航海を端緒とする。王族ジョアン・カルロスの長期旅行はかなり複雑な要因から成り、やがて汎ヨーロッパ的な大知識人との名声にも輝く。しかし、当初王権から授けられた正式の使命は、意外にも戦争の体験と軍事学の修得である。国務尚書（軍事・外務担当）ルイ・ダ・クンハは一七五七年五月一八日付訓令で、イギリス駐在ポルトガル大使マルチンニョ・エ・カストロに彼のの外遊出発と視察目的について指示した。モンテイロ・コスタ共著『第二代ラフォエス公爵ジョアン・カルロス・デ・ブラガンサー啓蒙の世紀における独自の生涯』には、こうした貴重な古文書が採録される。

国務尚書（軍事・外務担当）ルイ・ダ・クンハ

一七五七年五月十八日付 イギリス駐在ポルトガル大使への訓令

国王陛下におかれては、書物のみでは学び得ぬ戦争の奥義を体得させるため、ジョアン・カルロス・ブラガンサ閣下に、戦火止まぬドイツ各地を視察するよう命じられた。神の慈愛により我らの王国ではユトレヒト条約以降永きにわたり平和が維持される反面、かかる奥義は戦争の渦中でのみ把握できるものである。愛徳と寛仁を讃える世評を聴き及ばれ、国王陛下はジョアン・カルロス・ブラガンサ閣下にこうした使命と栄誉を授けられた。リスボン港よりファルマウスへ向かうバケット船に近日乗船される予定である。・・・

なお、手続きに手間取ろうとも、閣下の行先と目的は極秘とし、通常の旅行者のごとく処理されたい。^①

ジョアン・カルロスの外遊について格段に幅広い目的を暗示するのは、英国宮廷に宛てたエドワード・ヘイの公文書である。震災下のリスボンにおいてラフォエス公爵兄弟と同じく、被災者の救援に挺身したポルトガル駐在大使カステルスが、近々五月二日在留民に惜しまれつつ公邸で病死した。翌日自国に大使の逝去を急報したリスボン総領事ヘイは、まもなくカステルスの後任に任命される。つい同月二十日付報告でヘイは、カステルス大使への哀悼を誌とともに、ジョアン・カルロス・デ・ブラガンサの人柄と出発について述べる。

イギリス大使ヘイ 一七五七年五月二十日付外務長官ウィリアム・ビット宛公用至急便

このたびジョアン・ブラガンサ閣下がウィーンへの長旅に立派に出立され、まずイギリス行きパケット船に乗船されます。閣下はラフォエス公爵のご令弟であります。お二方は国王ペトロ二世の庶子、ミゲル公のご子息にあたります。ラフォエス公爵は高等法院院長の要職にあり、ご令弟もまた現在の国王およびポルトガル国民から篤く尊敬され、イギリスにもつねに裨益されるところ大であります。国王陛下がジョアン・ブラガンサ閣下に外遊を命じられたのは、特定の用件のためではなく、見聞を広めるためと思われます。イギリスに

① Nuno Monteiro e Fernando Dóres Costa, *D. João Carlos de Bragança, 2 Duque de Lafões, uma Vida singular n Seculo das Luzes*, pp.25.

ついて深い関心を抱き、ロンドンにも一定の期間滞在したいと、私に申しました。三十歳前後の若さで閣下は、非凡な資質に恵まれ、温和な人柄であります。イギリスの国王陛下と宮廷が閣下を歓迎し、国民の福祉を高めるなんらかの事業をお見せできれば、ポルトガル国王も喜ばれるでしょう。^①

一七五七年六月十四日にジョアン・カルロス・ブラガンサはロンドンに到着し、六月上旬にロンドンへ到着し、随員とともにイギリス駐在大使マルチンニョ・エ・カストロの邸宅に投宿した。以後彼は英国宮廷で国王ジョージ二世に拝謁するとともに、多くの王族や貴族交誼を結ぶ。また、イギリスの各地へ旅し、ポーツマスではイギリス艦隊を視察、オックスフォードではさまざまな祭典に列席した。一七五八年一月十七日メロ・エ・カストロはイギリスの首都における送別についてつぎのように報告する。

当初予定されたよりジョアン・ブラガンサ閣下はロンドンにながく滞在され、この国について深い認識を得られましたので、王宮の謁見室において英国国王陛下と王室ご一同に辞別の挨拶を鄭重に述べられた模様です。また、さきの水曜日閣下は内閣官房で多大の荣誉と顕彰を授けられ、ついで木曜日に私も一緒に王太子殿で軽食を頂き、しばらく歓談したのち、王女宮殿へ案内されました。そこでは内庭に面した謁見室で挨拶を交わし、王妃宮殿とともに住まれるエドゥワード王子、オウグスタ王女、イザベル・カロリーナ王

① Edward Hay, *Despatch dated the 20th May 1758 to William Pitt*. National Archive SP 89/51/16.

女、アメリカを各居室にお訪ねしました。さらに昨日はそこに来られたアメリカ王女に挨拶を済ませ、ウィンザーに居住されるカンバード公爵は、月曜日にロンドンへ来られます。これらすべての王子と王女が、ブラガンサ閣下の風格と熱意に相応しい形で、歓送の宴が営まれるであろうと、報告致します。^①

ジョージ二世は七十一歳の高齢であるが、前線で陣頭指揮を果たした最後の英国国王であり、オーストリア継承戦争の際にはフランスの陸軍を一七四三年デティゲンの会戦でフランス軍を撃破し、マリア・テレジアの即位を援護した。また、ジョージ二世の次男カンバード公爵ウィリアム・オーガスタスも、二二歳でデティゲンで戦闘に参加し、一七四五年にはイギリス・オランダ・オーストリア連合軍の総指揮を執り、フランス軍と対決した。その翌年スコットランド・ガロデンの戦いでジャコバイトの反乱を容赦なく鎮圧した。一七五七年七年戦争に際してカンバード公爵は、ハステンベックの戦闘でフランス軍に敗北し、翌年一月軍役を退いて、ウィンザーへ隠遁したのである。なお、ジョージ二世の長男フデリック・ルイスは王位継承を待たず早世し、その子ジョージ・ウィリアム・フレデリックが王太子に序されて、やがて一七六〇年ジョージ三世として即位する。^②

英国王室に別れを告げたジョアン・カルロス・ブラガンサは、一七五八年一月三十一日随員とともにブリュッセルに着いた。この都市は十六世紀にハプスブルク家の所領となり、有名なグラン・パレスを拠点として織物業者

① Monteiro e Costa, *op.cit.*, pp.

② Battle of Dettingen in *BritishBattles.com*, online.

のレース産業が発展した。しかし、ルイ十四世の膨張政策によって市街は壊滅し、一七四九年にフランス軍に占領された。その三年後ブリュッセルはオーストリアに返還され、一行が訪れたとき街々は復活祭で人波に溢れる。ここでは祭典や芝居を楽しみ、芸人の一座とも興じた。日曜日の仮面舞踏会も趣向を凝らしたものであった。^①

同年の三月二日一行はようやく神聖ローマ帝国の帝都に着いた。一七四八年オーストリア継承戦争が終結し、皇帝フランツ一世および皇妃マリア・テレジアの統治のもとでウィーンは繁栄を謳歌しつつある。ジョアン・カルロスの旅程と動静については、オーストリア駐在大使アンドラーデ・エ・カストロがポルトガル宮廷に逐一報告した。モンテイロ・コスタ共著『第二代ラファエス公爵』の論述を引用する。

一七五八年の三月上旬ジョアン・カルロス・ブラガンサは、究極の目的地ウィーンに到着した。リスボンを出発して一年後である。ただちに公式の歓迎が用意された。女帝メリア・テレサの宮廷に派遣されたアンブrosio・フレイレ・デ・アンドラーデ・エ・カストロは、三月五日国務尚書ルイ・ダ・クンハ・マヌエルに早速報告する。「ジョアン・カルロス・ブラガンサ閣下が今月二日深夜に到着されました。新規の来訪者に必要な手続が昨日なされ、閣下は謁見の間において本日皇帝・皇妃両陛下を拝顔し、携えた書簡を渡されました。念願の地に来て、鄭重に歓迎されたのであります。ウィーンを訪れる外国の貴顕も大抵は経験しないのですが、宮廷武官が私たちを皇妃の間から皇帝の間へと案内してくれました。皇妃陛下が私たちを謁見

① Monteiro, *op.cit.*, pp.51-52.

されたのは、憩いの間とよばれる小部屋でした。翌日には皇帝陛下と皇帝ご一家にお会いしました。」

しかし、ジョアン・カルロスは戦場での従軍を切望し、その可否を決めるのは全能の國務尚書、カウニッツ伯爵の権限なのである。テレジア治下の宮廷についてアンドラーデ・エ・カストロはさらに述べる。「準備を調べれば、すぐにも従軍できるようです。・・・昨日私どもはカウニッツ伯爵と晩餐をともにし、食前にジョアン・カルロス閣下はそうした希望を伯爵に伝えたとの由であります。」ただし、どのような資格で軍隊に参加するかは、なお不明であった。「皇帝・皇后両陛下と、」アンドラーデ・エ・カストロは三月十九日さらに伝える。「閣下は晩餐をともにされました。「國務に携わる貴顕や特別に許された貴婦人を両陛下は日々食卓へ招かれるのです。」

モンテイロ＝コスタ共著『第二代ラフォエス公爵』^①

オーストリア宮廷で政治の全権を担うヴェンゼル・アントン・カウニッツは、中世に発するボヘミヤ貴族の家に属する。枢密院議員の子息として一七一年に出生した彼は、ウイーン、プラハ、ライデンで神学、哲学、歴史、法律などを学び、さらに名門のライプツヒ大学で著名な学者シュヴァナウの門下として、公法および私法、修辞学や音楽などの諸領域に綿密で幅広い薫陶を受けた。さらに一七三一年から巡歴に旅立ち、ドイツ各地をはじめオランダ、イタリア、フランスで学業を積むのである。修業のためとされる当時のヘグラント・ツア

① Arthur Hassal, *The Balance of Power 1715-1789*, London, 1907. pp.238-239.

ーもともすれば漫遊や遊樂に流れるが、旅するカウニッツはどこでも日々探究と研鑽を続けたとされる。^①

一七四〇年オーストリア継承戦争が勃発するや、カウニッツはフイレンチェなどイタリア各地へ外交使節として派遣される。その後ネーデルランド総督としてフレデリック二世の攻撃に抗し、一七四八年オーストリア代表として平和条約に調印した。一七五二年からフランス駐在大使に任命され、ヴェルサイユ宮の高位高官、なかでもポンパドゥール侯爵夫人と交誼を結び、ブルボン＝ハプスブルグ両王家の連帯に素地を敷くのである。

リスボン大地震が勃発するほぼ二カ月前、マリア・テレジアはフランスとのポンパドゥール侯爵夫人の強力な推進、ダルジャンソン伯爵等二名を除く閣僚全員の賛成により、一七五六年五月一日三カ条からなるヴェルサイユ条約が調印された。^②

大使としてバりに派遣された三年間、幾多の労苦を重ねてカウニッツが築いた交友関係に、いまや豊饒な成果が実るに至る。ポンパドゥール侯爵夫人との友誼によって、国王ルイ十五世に直接奏聞する方途も確保できた。統治者として国王には弱点があつて、好んで外交政策を司りながら、正規の閣僚に囚らず、重要な政事を独断で決裁する。国王の心は寵妃からの勧誘で傾くと言ってもよい。(一七五五年八月)カウニッツから特命を受けた二日後、フランス駐在大使スターレンベルクはポンパドゥール侯爵夫人を訪れて、オース

① Franz A. J. Szabo, *Kaunitz and enlightened absolutism 1753-1780*. Cambridge 1994. pp.12-13.

②

トリア国務尚書の書簡を届けた。スターレンベルクがとくに布石を懇請したのは、重要な案件を不安なく協議できる人物との会談である。会談の相手にはボンパドゥール侯爵夫人に敬愛される外務長官、フランソワ・ヨアキム・ド・ベルニ神父が選ばれる。こうして寵妃の御殿の一隅、庭園の池亭ラ・バビオルでフランスとオーストリアの軍事同盟が提起された。当初密謀として秘められたものの、まもなく閣僚の数名はこれに関与する。いまや第一歩が踏み出され、オーストリア宮廷の提議検討をフランス国王が同意したのである。

① ついに一七五八年五月五日ジョアン・カルロス・ブラガンサは戦場へ出発し、ダウン元帥率いるオーストリア軍の隊列に加わり、フリードリッヒ二世翼下のプロシヤ軍を攻囲した。ポルトガルの国務尚書セバスチアン・ジョゼ・カルバリヨの後妻は、ダウン元帥の親族である。ホックキルへにおけるオーストリア軍の勝利を含め、同年数々の戦場でジョアン・カルロスはダウン元帥に随伴した。ポルトガル大使フレイレ・デ・アンドラーデは一七五八年十月二日付報告でウィーンから伝える。ジョアン・カルロス・ブラガンサ閣下はダウン元帥に随伴して長期にわたり戦場におられる、と。しかし、西ヨーロッパで実証されるとおり、寒気が和らぐまで西ヨーロッパでも争闘が途絶える。気象の様相によって暗黙のうちに冬季休戦に入った。実際にジョアン・カルロスは十一月末に戦場から去り、十二月十日ウィーンに帰った。数ヶ月またそこに滞在するのである。〈中略〉

一七五九年ジョアン・カルロス・ブラガンサはウィーンの華かな社交界をまたもや離れ、再度戦場へ赴い

① J. Frank Bright, *Maria Theresa*, London, 1897, p.106.

た。僅かな記録しか見当たらずなもの、同年八月クネルスドルフの会戦に参じたことは知られている。この会戦でオーストリア軍は劇的な凱旋を遂げ、プロシヤ国王フリードリッヒ二世を捕獲寸前にまで追い詰めた。さらに同年十一月オーストリア軍が勝利したマクセンの会戦にも関与する。そして、冬期にはやはりウィーンに帰った。一七六〇年六月中旬ジョアン・カルロスはまたも出陣の用意をした。「国王陛下にご満足頂き、」と国務尚書ルイ・ダ・クンハは誌す。「ご推挙を裏切らぬ人材とポルトガル宮廷で評価されるために、三たび遠大な戦場へ赴き、オーストリア軍隊に参加されます。」

モンテイロ＝コスタ共著『第二代ラフォエス公爵』

①

この間に祖国ポルトガルではボンバル独裁の強化など、重大な事件が相継ぎ、ジョアン・カルロスの命運をも左右するに至る。一七五八年彼の実兄ラフォエス公爵ペドロ・ヘンリック・デ・ブラガンサが、ポルトガル宮廷の有力者として逝去するも、ジョアンは祖国への復帰を自重した。

ジョアン・ブラガンサの広汎な旅程は、すべて把握することは難事である。一七六四年にはブリュッセルとパリに滞在し、一七六五年にはインスブルックの宮廷を訪れたこと、その後数年ドイツ各地を巡歴し、一七六八年にはスイス旅行も予定したことは確かである。一七六九年彼はプロシヤ国王フレデリック二世と

① Monteiro, *op.cit.*, pp.52-53, 56.

会見した。「ジョアン・ブラガンサ閣下は」、と（オーストリア駐在ポルトガル大使フレイレ・デ・アンドラーデは伝える。「プロシヤ国王に拝謁し、鄭重に歓待された。おふたりが論じられたのは、戦争の意義と戦略・戦術についてである。かつまた、最新の芸術と学問に関して歓談された。プロシヤ国王は学芸を篤く尊重し、ブラガンサ閣下は博学の士だからである。」この年ジョアンはまだ知らざるヴェネチアを訪れ、ナポリ、リヴォルノ、ピザにも滞在した。一七六九年になされたオーストリア皇帝ジョゼフ二世とプロシヤ国王フレデリック二世の会談には彼が招かれ、唯一の他国人として同席したのである。以後数年にわたる旅程は詳らかでないが、ウイーンで任務を続けるとともに、なおも各地を巡歴した模様である。とくに注目すべきは、一七七四年ジョアン・ブラガンサがロシア女帝エカテリーナ二世と会談した史実で、各方面への衝撃をも含め、興味深い証言がロムロ・デ・ゴヴェルノによって明らかにされた。同年六月サ・ペレイラはポルトガル政府に寄せた報告によれば、ジョアンはワルシャワへ出発し、さらにそこからサン・ペテルスブルグとモスクワへ旅すること、また十二月下旬にストックホルムとコペンハーゲンを経て帰る計画した。その八月実際に彼はサン・ペテルスブルグに到着し、数日後首都近郊の離宮でエカテリーナ二世に拝謁した。ロシア女帝と会見したあと、彼はロシア帝国アカデミーを訪問し、同アカデミー会員に推挙され、四ヵ月ロシアに滞在した。フランス啓蒙思想に係り深いドイツの知識人、フリードリッヒ・メルシオール・グリュムは、ジョアンの人柄に向けた篤き敬愛を、ロシア女帝への書簡において六度誌している。^①

① Monteiro, *op.cit.*, pp.69-70.